うしの脈管腫性脳膜腫　Angiomatous Meningioma

鳥取大学農学部家畜病理学教室出題

第10回獣医病理学研修会標本 No.136

動物は7才のめすの和牛で，岡山県で産まれ，同県内で飼育されていた。1968年6月9日に5産目を分娩した。9月10日頃から食欲がなく，頭部右側を下に，左側を上にしているのをみつけたが，その後も恢復しないので，9月16日往診し，外へ連れ出そうとして左に綱を引くと歩様が乱れて転倒した。しかし右へ半回しながら引くと歩行可能であった。9月18日に再度往診したが，歩行困難で食欲もなく，中枢神経麻痺と診断した。11月1日症状が悪化したので廃用と決定し，11月7日屠殺した。

肉眼所見（ホルマリン固定送附材料）

脳橋部後方左側，延髄下部に拇指頭大のやゝ扁平な腫瘍が認められた。硬さは柔らかく，脳硬膜とは密に附着しているが，延髄からは容易に剥離された。重さは12.5 g であった。延髄は左側から右側半ばにかけてこの腫瘍のため圧迫されて陥凹していた。

組織学的所見

腫瘍は卵円形のクロマチンに富む核を持った紡錘形或いは卵円形の細胞から或り，細胞が密に配列された実質性の領域と，腔隙形成の著しい領域とに分けられる。前者では細胞は上皮様，或いは層状に配列，増殖し，その中に巨大核を持った細胞も認められる。又石灰様物質の沈着もみられる（写真1，H.E.染色，×280）。後者ではこれらの細胞の間に多くの大小の腔隙を形成し，多くは内容は空虚である（写真2，H.E.染色，×140）が，一部では赤血球を容れるものもある。又海綿状の構造を示すものもある。その周辺の細胞にはやゝ輪状に腔隙を取り囲んで配列するものもある。銀染色においては実質性領域にも，腔隙壁にも嗜銀線維の発達が著明である。しかし脂肪染色はすべて陰性であった。

腫瘍附着部の延髄では実質の疎開，神経細胞の浮腫及び硝子化，血管内皮細胞の腫大などが見られた。

組織学的診断

脈管腫性脳膜腫（髄膜腫）angiomatous Meningioma

髄膜上皮から発生した脳膜腫である。動物では主として fibromatous のものか，endotheliomatous のもの，或いはその移行型が報告されており，人にみられる angiomatous のものは少ない様である。しかし腔隙形成の傾向の強いことから angiomatous の脳膜腫と診断した。